傑出した研究者であり教育者である藤田英典先生に深い感謝を込めて
In Deep Gratitude to Professor Hidenori Fujita: Eminent Scholar and Teacher

佐々木　輝美 SASAKI, Teruyoshi
● 国際基督教大学
International Christian University

2010年 2 月17日夕方，藤田英典先生の最終講義が行われた．演題は，教育と自由・共生・正義の制度的基盤 ― 教育社会学研究者としての歩み ―．会場となったICU本館367の大教室は，学生，教員，卒業生，外部の関係者で一杯になった．告知は学内関係者に限定したにもかかわらず，最終講義の情報を聞きつけた外部の関係者も集まってきた．6 ページのレジュメと分厚い英文資料が配られた．資料をよく見ると，Harvard Education PressおよびTeachers College Pressから2009年と2010年に出版された藤田先生の論文である．講義への気迫が伝わってきた．予感通り，講義では熱いメッセージが終始語られ，質疑応答も心地良い緊張感のあるものだった．

この先生が本当に他大学に去っても良いのだろうか？講演に先立ち，司会者として次のような藤田先生の経歴を紹介しながら思った．

スタンフォード大学でPh.D.を取得後，主に名古屋大学と東京大学で教鞭をとられ，東大時代には，教育学部長，大学院教育学研究科長，ハラスメント相談所長を務められた．2003年 4 月にICUに着任後，日本学術会議会員，中央教育審議会委員にもなられ，2005年 6 月には東京大学の名誉教授に．昨秋からは日本教育学会の会長に就任された．2006年と2007年には，教育に関する参考人として国会で意見陳述．そして，業績に目を移すと，著書は単著・共著を含めて25冊，論文や報告書は，ICUに来られてからの 7 年間だけで何と70本以上ある．

さて，少し視点を変えて2003年 4 月に藤田先生がICUに着任された時のことを振り返ってみる．私も藤田先生とほぼ同時期にICUに着任したが，当時の最も大きな課題は，私たちが所属する大学院の視聴覚教育専修の改革であり，専修の大学院在籍者はゼロであった．藤田先生にはたくさんの知恵を頂き，専修名を「メディアと社会」に変更し，大きなカリキュラム改革を行った．その結果，あっという間に大学院生が増え，博士前期と後期を含めて常時10名前後の大学院生が在籍する専修となった．その後，藤田先生には 7 年間で博士前期課程および後期課程あわせて10余名の課程修了生を育てられた．

加えて，学部の卒論指導生の数は驚異的である．常時平均15名前後の卒論生を抱え，ここ 2 年間は毎年25名以上の卒論指導を行い，その中には教育の領域で優れた卒論を書いた学生に贈られるトロイヤー賞を受けた者もおり，質の高い論文指導を行われた．指導した学生の中にはさらに研究

を続けている者が多く，卒論指導生のうちの17名が国内外の著名な大学院に進学している．

ICU21世紀COEプログラムでは，サブリーダーの一人として貢献された．藤田先生のICUにおける研究・教育活動は並外れたものであり，そのご貢献に深い敬意と感謝の念を表したい．同時に，このような傑出した研究者であり，教育者であり，また公私ともに正義感の強い藤田先生には，大学の理性的なサポートを得て是非ともICUにお残り頂きたかったと思う．

藤田先生の分厚い経歴書を何度も眺めていると，次の部分が目に留まった．「日本学術会議会員：『知の創造：21世紀の教養と教養教育』分科会委員長」，リベラルアーツで生き残りを目指すICUが失ったものは大きい．